

昭和十五年

(三十九)

合掌 南無阿弥陀仏

原稿の為に御返事が遅れました。先日は誠に誠に御便り有難うございました。朝は貴女の有難い尊い御便りに接し、夜の講演の最中に兄上の御便り頂戴致しました。同じ日に御二人から御便りが来まして何とも言いようのない不可説の感銘をどうすることもできませんでした。よくこそよくこそ姉様、其処まで出て下さいました。一人の念仏行者の重きこと、虚空に等しく、大海に同じきものであります。かるが故に善導は、希有人と讃え、最勝人と嘆じたまうのであります。(以上大麻にて)

雲州がすんでそして黒沢がすみ、今日明覚に移り、外には雪が降っています。

姉さん。毎日幾度かあのお便りの言々句々が思い出せます。嬉しく思います。誰にか心からお礼を申したい気がします。その誰かがみ親であることに思い至ります時、念仏申さずにはいられます。うるさく私の歩む処には憎悪の音が満ち、迫害攻撃の弾丸が飛び散っていることではありますが、その中に私を喜ばして下さいことは、念仏の行者が誕生して下さいであります。私は一人の行者が生まれて下さる為ならば、どんな苦難に会ってもいいと思つています。然し一人の念仏行者は決して私の力では生まれて来ません。そのことが思われるが故にひれ伏すより外にないことでもあります。大法がなければ、そしてその人の中に尊い宿善がないならば決して一人の念仏の行者が誕生するものではありません。わかして下さいさうな方がどうしても念仏の世界に生まれ出てくれない時、言いようのない悲しさをおぼえます。今日も毎日この喜びと悲しみを抱いて歩んでいます。限りなき明暗が一つになつて私を念仏の中にひき入れて下さることあります。

姉さんの上にあつた尊い宿善を拝まじにはいられません。外にはアラレの降る音がしきりにしています。本堂では夜の勤行の音がしています。江州の能田さんは、十四日に黒沢にて一日すごし、その夜の一時頃、坊ちゃんが重態との電報にて、十五日の朝発つてかえりました。その夜は心配して一睡もせず朝早く。この月一ヶ月をあれだけ喜んでいましたのに、聞こうとしてさえ聞かれないのが御法です。思い出す度にさびしい気がします。今頃、病める子とその親はどうしていますやら。

兄上がご進級なさつておめでとございます。お帰りになるかと思つたのに、現職のまゝとのこと、無上の光栄とお喜びの兄上です。有難いことでもあります。然し何かと心組みなさつていなさつたのであろう姉上には、又しばらく、山でお待ちなさるようであります。どうかこの間を、み法を聞けと如来から賜つた時だと思つてご精進下さいませ。もう又すぐ春の聖会が来ます。聖会を待ち遠しく思つて下さるみ心、有難く存じます。多忙で仕事が沢山ありますので日が早くたちます。あと八日で帰ります。

恵まれない人たちの現状が私の耳に入る時私の心が暗くなります。いよいよ本願のみ救いの尊いことが思われます。そして、この人間苦の満ち満ちた大地の上に、大

悲のみ光が光っています。人間の曠野に流れていて下さる大悲の御心を拝みつゝ旅を続けています。央子ちゃんは無量寿の御心でしようか。彼岸が近よっているのに、山陰はここ三四日間雪で寒いことでもあります。央子ちゃんが風邪ひかぬように念じています。御ばばちゃん、お母さん、義坊によく言つて下さい。これでおきます。

昭和十五年三月十七日夜

夜晃

廣安郁枝姉様

(四十)

合掌 南無阿弥陀仏 お手紙頂いたのは、二月に台湾から帰つて来た時でした。然し私は毎日毎日誠に多忙であつて旅にありつゝも、講座の間は何時でも仕事です。然しもう四月が来ます。二十六日本部に帰りますが、二十八日には又春の講習会の会員が集まります。そしてそれが四日にすむと四月には岡山、兵庫、大阪、京都地方にまいります。然し又々多忙です。今日はどうしても第一に貴女にお便り書かねばなりません。

病氣は何でしょう。お察し致しますと肺結核系統の病氣ではないかと思われまふ。若しそれでしたら必ず快くなりますから、専心ご養生なさい。特に食事に当たつて、一口の御飯を百回以上かむこと、御飯とおかずを別々相互にかむこと、それを絶対に2御実行なさること。一時間食事にかげよ。

「聖光」を決して失われぬ様に全部とつておいて繰り返し繰り返し交々お読み下さい。私にも会わず、講習にも来ずして、大安心の境に念仏して居られる方は、皆これほど思うのを幾十回と読んで下さった方があります。毎日合掌してお念仏の中にお暮らし下さい。

一切のものは諸行無常とて変わつてゆくものばかり、内にも外にも。唯永遠に亡ばぬものは無量寿のみ、仏のみ。この常恒不変の太行、その名号の太行のみ貴女を乗せて生死の海を度して下さることでもあります。この名号の中にある御意を本願というのであります。この本願の御意、大慈悲の御意を聞く、真に聞く。真実教はこの意を説いたものであります。その御意を知らせて頂くために聞くのであり、読むのであります。そして又

私が御法を聞かずに、御法で私を聞いて下さい。鏡の前に立つた心で、そのところに私の真の相があらわれます。あらわれて来る心、その心があるまゝで大悲に抱かれる。内と外とに何がおころうと御念仏申すこと、念仏は内観の世界に開ける。

然し私の相をしることゝ如来の大悲を知ることゝ二つあるのではない。大悲の智慧光に照らされて私の真相が見える、見えるまゝが大悲の中にある。

「まかせきれぬ苦しき」とありますが、それは盲にしてはならぬものを盲にしているが故です。無視してはならぬ唯一の真実、絶対の真実、無視してならぬものを無視する心故であります。盲にしても盲にはならぬ。無視しても殺しても、真実なる大悲

は生きています。現に私と貴女と見もせず、会いもしないのに、一筋の白い縁の糸は現れて来ています。「念仏申せ、久遠の親が助かる。親が助かれれば子が助かる。子が助かるで親が助かる！」白いこの一筋糸よ、胸から胸にこの大悲の誓願を伝えてくれよかし。もう時がない。失礼します。お大事に、一度お会いしたいと思えます。

それから苦しい事困った心、疑いがおこればもつと具体的に書いてよこすこと。

昭和十五年三月二十五日

夜晃

吉田俊子様

(四十二)

合掌 南無阿弥陀仏 諸行無常の痛ましくも胸にせまる春、愛別離苦の淋しさ胸に川越の地にご転任なされたとのことと存じます。電報を頂いた時は聖会中のこととて失礼いたしました。感慨無量のものがあります。三保の地も亦私には因縁のない地になりました。あはれ三月が名残りであろうとは。

二三御注意申し上げます。赴任早々より決して御法のことお出しなさらぬように「深く内心に蓄えて」の御教訓を帯びし、船中、路上と考えて、軽々しく内心心中を下さぬようになされたし。

長期にわたつての時は人格より外にものを言わざることを思い、口の仏法にならぬように、無言のまま、内観の世界、全体の仏法になつてこそ底光りのするもの、よろしく御氣をおつけ下されたし。

軽快の尊きは軽率をいむためであり、謙虚を尊ぶは卑屈を嫌う為であり、尊厳を尊ぶは高慢を呪うが故であり、随喜を尊ぶは妄動を謹まんがためであります。よく己が欠点、短所、悪行煩惱を内観凝視して、新奇をてらわず、己を誇らず、軽率をつつしみ、無言、ただ当分校長の椅子によつて、村の、部下の、児童の言うところ、為すところを、念仏の鏡に受け取り、然る後、教育的実践の歩を進められるよう。赴任早々、巻頭言を出すようなことは御謹みなさるよう。校長としてこの重厚を欠けば、千の実行も、軽侮の種となるべく、他人の仕事をとつてせざるように、学校長自ら垣根の草をぬくを知りて、教育是の決定をなしあはぬが如きは、顛倒であります。

特に部下職員に対しては、恩威並び行われて決して甘きに失せざるよう、平等の大悲に乗托して終始一貫の行歩をふみ出されるように。

何もお念仏の中に考え、お念仏に相談して、校長生活を分段生死におわらしめず変易生死をとげられるように。淋しくなった時はひそかに明覚をまねいて御讚嘆なされたく、然しながら最初より光明団は出されぬがよろしいと考えます。

はあちゃんの喜び方、まことにくきまでに幸な子。退塾者は泣いて泣いて泣きぬれて数日をすごし、それぞれ旅に出てゆきました。この世のさびしさです。御転任ともなればいよいよ本部においていいことをしました。

奥さんお達者ですか。お念仏申して今日一日を、口をつつしむこと。

昭和十五年四月九日

佐々木清一郎様

夜晃

(四十二)

合掌 南無阿弥陀仏 お手紙有難う。

念仏がものを言わねば欲がものを言う。あの世の真実に生かされないものはこの世にはびこりたいただけだからである。○○さんがなぜまけたか、それは久遠劫来の我にものを言わせたからである。△△さんも御用事で東京に帰ってまだ来ない。念仏しながらジーンと考えて歩まないと何をするか分からない。有難くなるだけならあまりむつかしい事はない、本仏本師の御心に叶うことがもつとむずかしい。○○さんは念仏の彼方にあんな尊い世界があつたのかと泣いて喜んだが、念仏の手前にどんな恐ろしい心があるかを知らなんだ。泣いた涙も空しく去つて行つた。△△さんも去つて行くかも知れない。みんな皆十九願の仮の世界。たった一人、たった一人、どこにいるのかその人は。歡喜があつて自己を見ないものは、歡喜しても後には底知れぬさびしさがある。念仏は一人いて喜ぶ法なり。

旅から旅に花が咲いてはいるが車窓から見る花、世にはその花専門の旅をしている団体がある。京大阪では命がけのその様を見る。花は窓から見て足りる。念仏の一筋道、今日も明日もかくして永久に。

昭和十五年四月二十六日

夜晃

下岡静子様

(四十三)

合掌 南無阿弥陀仏 お手紙確かに拝見しました。不思議な因縁を感謝せずにはいられません。世界十六億、否一切衆生はことごとく悩んでいます。しかも真実の教えにふれ、真実の如来に救われるものは至極の少数であります。しかるに貴女は、まだ見ぬ私に因縁があつて、私を通して久遠劫来のみ親の御意を聞いて下さる。何という貴女は幸福でしょうか。心を静めてよくよく思念して下さい。

「見えぬみ親のおはからいを感謝しながら、有難く有難く頂きました。一字一句これごとごとく如来さまよりの御頂きものに外ございません」と貴女は言う。何故その思いをもつともつと深めてゆきませんか。その言葉通りでしたら、何を不足を言うのです。

南無阿弥陀仏はみ親のすべてである。み親の願も行も、大功德もおん命も、お慈悲も大智慧光明も、全て具足した、全法界をつくした、絶対不二の「功德大宝海」であ

ります。永遠を貫くたった一つの大行、それがそのまま貴女のすべてである。合掌して、まさしく合掌して念仏申させたまえかし。如来は現に浄土寂靜の境にましますまが、念仏の貴女と共にある。合掌して念仏申させたまえ。我が乞うが如く、今の今なしたまえ。如来は貴女と共にあり。虚空は引けども来たらず、忘るとも失わず、常住なる如来は虚空の如し、されど大慈悲なるが故に悩み求むる貴女をどうして離れようぞ。

久遠劫来の自力我慢によつて、この唯一の真実に背をむけ、逃げてでも逃げてでも遙かなる旅路にあるものを、貴女となす。静かに内心を凝視してこのことを知りたまえ。逃げれども逃げれども如来の大悲の逃げたまわんや。今追いつめられてこの大法を聞く身とならせたまう。その疑いを出し、なおも文句を言うているその貴女までが、大悲のお育てと知らずや。

出来ては壊れ、出来ては壊れるは、信心にはあらず、煩惱の変形なり、大信心は六字の名号なり、如来本願にすでに大信心海を成就してこれを六字の大行となしたまう。この本願の大悲を憶念して(大悲憶念したまうが故に)内心を凝視したまえ。内心には貪欲、瞋恚、愚痴、苦痛、執着、不平等々、凡そ一切衆生のおこすほどの悪心欠ぐるところなきが、この我ならずや。これを美しくしようとするは自力なり。この正体を知らざるは光なきが故なり。

実にこの煩惱海こそは ◎如来本願大悲の現実的根拠なり。

◎涅槃は如来の理想的根拠にして ◎衆生の悪逆はその現実の根拠なり。

かるが故にこの悪逆を深信せざるものは大悪を領解するに由なし。生の執着恐るるに足らず、本願を疑う心おそるべし。「人格」とは内心水晶の如く清くなること、考えるが如きは女学生時代にのみ通用する仮の世界、優等生の才媛も一度世界に出づれば如何なる悪逆を行ずるやも知れず。人は之を修養の不足と言う。偽である。自覚の不徹底なり。如来のみ実在します。我内心には悪のみ存在す。あるがまを見、あるがまを知るものに壊れたるためしなし。人格とは信念である。信念とは如来本願を信ずる心である。如来本願を信ずる者は自己のありのままを知る。

あるがま、の自己を見つゝ念仏申すこと。たとえ内と外とに何がおころうと如来本願の尊きことを信じて疑わぬものを最上の智者となす。一一の煩惱は念仏の助縁なり。煩惱をなくして美しくなりて念仏申さんとする心、自力である。美しくなり得ると思う心、高上がりです。親鸞聖人にして愚禿と名告り、地獄一定と仰せられ、智慧第一の法然坊にして、十悪の法然坊、愚痴の法然坊と仰せられたるを思いたまえ。

今日はこれでおきます。私はこれから九州のとても有難い寺へゆき、つづいて朝鮮京城にゆきます。五月末日、本部へ帰ります。それでこれをよく読んで、又心のままを書いて本部あて送っておきなさい。「聖光」だけでなく、「光明」(毎月二十日発行)も読んで下さい。気をつけてご養生下さい。御飯を百回以上かむこと。

念仏申すこと。あなたが教えの通り精進して本仏の御冥見に叶はゞ、あるいはお会いする日もあるかとも思います。お大事に。

昭和十五年五月十七日

吉田俊子様

夜晷

(四十四)

合掌 南無阿弥陀仏

大変暑くなりましたが、御無事でご奉公ご精進が出来て結構です。度々お便り下さって誠に有難く拝見致しました。多忙な為にその都度お返事は差し出さないが、嬉しく有難く拝見致しています。お念仏の心を中心として、警察官としての修養をつんでいられること、誠に有難く存じます。

仰せの通り、国家社会の安寧秩序を維持する尊いお役目につかして貰うのですから、自覚と覚悟がなくてはなりません。それには一生涯内心深くお念仏の心を持つて一貫させて頂くことが何より大事であります。どうか、今日の心を一生涯忘れぬようにして下さい。

朝鮮の慶本さん「光明」の「念仏の縁に沿いて」の七月号を見て下さい）は、私に言いました。警察官は損をします。監督の立場にあるので、その中に、何でも知った気になって、高上がりして御法など求めようとはしないようになる。私は損をしたくない。慶本さんの友人で横山さん（この人も講座に出てくれました）は警部になつてゐるのに、慶本さんは仏法研究のみして、そして仕事の主任なのでその方に働いて試験を受けず、今でも巡查部長です。昨日もお手紙を呉れました。その中にいわく、「この紙をくれ候人にこの法を飽くまで聞かせたく、何時になればそれが出現致すことに候やらん」との仰せ、小生身に余る光榮、勿体なき限りに御座候、「このお手紙下され候人の随行、鞆持ち願いたく候。何時の日になればそれが実現致すことに候やらん」と「□獨語仕しおり。」

（紙とは、これはこの手紙を送つてくれたのでお礼状を出したこと）等とあります。慶本さんにまけぬように精進して下さい。

長い間には、馬鹿臭くなつたり、辛かつたりすることもあるでしょう。或る時は誘惑があることもありました。

役目を利用すれば出来る様な場合があることがあります。

そうした時、どうか、お念仏を忘れずに一切を念仏を通して行い、見、言葉に出して下さい。真実のみが一貫することを信じ、人は何れの職業によらず、忠実に尽くすところに尊さがあることを信じて忠良な警察官となつて下さい。お会いして色々お話を致したいと思いますが、何時かわかりません。それで色々と思いつきを書きました。それから文字を丁寧に書く習慣をつけなさい。これは将来の上に大変大事なことであります。初めは正しく楷書を書くつもりで書くことです。文字を正しく書かないと一生にはとても損をします。ではお大事にご精進下さい。

昭和十五年七月十六日夜

(四十五)

合掌 南無阿弥陀仏

仏様はいられるか。

仏様はいられぬか。

問題は簡単です。この簡単な問題にはつきり答えて下さい。この問題について明確に「いられます」と答えられぬ限り駄目です。「仏様はいられますが、私には……」その「が」がとれきるまで考えなさい。天に仰ぎ地に伏して、唯「如来の大悲のみまします」と手のはなされるところまで考えなさい。如来ましまさぬならば亦何をか云わんやです。大聖も聖人も皆ゼロだからです。そして苦しむことも生きることでも無意味だからです。「不滅の真実」なきに何でも生きると言うことが成立しますか。

如来はいられますが私には信心がない。と言うのでしょうか。その信心こそ自力です。如来と貴女と寄り合い世帯にしようするのです。

何が故に生きた如来を殺します？

何が故に四智の眼の曇りなきを盲にします？

「如来はいられますが私に……」と「が」をつける間、貴女は真実にして唯一なるものを殺すのです。盲であることを忘れて如来を盲にするのです。盲者は見ずとも、太陽の光この人を照らし出し、生かしているに違いなし。蟻は蟻位なものに一切を考え、貴女は貴女の程度に如来を引き下げ、殺して、盲にして……よくもまあ、大嘆息あるのみ。

愚かなる哉衆生、信ずべからざる世の雑音の一一を信じて、しかも信ずべき唯一の真実を信ぜず。今盗賊が家に入ったと誰か言えばふるえ上がるにちがいない。どろぼうの来たことは確かだが、私に信心が……そんな事があるものか。

如来は大寂の境にあつて一処を動じたまわず、一処を動ぜずして百千萬億の身を法界に示顯したまい、本処を動ぜず又移らず、後際を徹窮して身光を放つ。その光より外にこれに添えるべきもの微塵もあるべからず。大悲本願に事足りて今更何をか求めん。人間に許されたるは唯、大地にひれ伏して生きたる如来、明鏡の如き天智光明の前に懺愧と感謝あるのみ。必然の道。

俊子さん、如来はまことにましますか。

心の黒の黒まで知られ、一切を知りたまうにおはずかしくないか。そのままがいいか。そんな憍慢のまる出しでいいのか。光の前になぜ無条件に全我を投げ出して合掌して念仏申さないのです。

昭和十五年七月十七日

己を見よとは情けなくなるのだと誰が言った。泥だ泥だ、念仏は華だ、故に念仏のことを淤泥華と言う。あるがままを見つつ念仏申せかし。